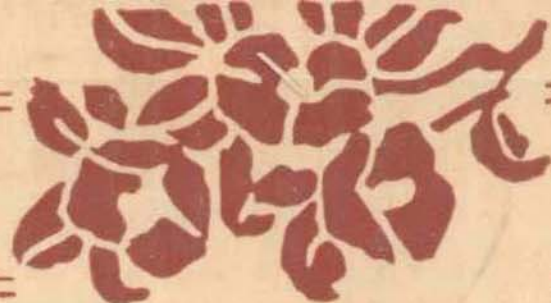


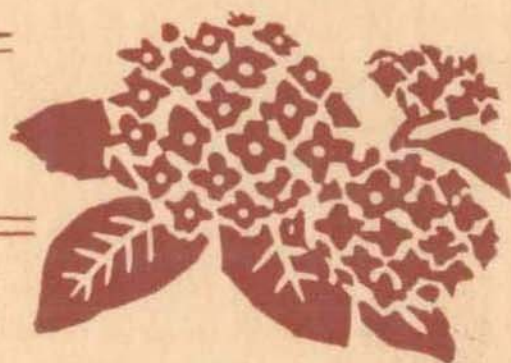


角川文庫

— 726 —

太陽のない街

徳永直



角川書店



折口学と古代学



慶応義塾大学
国文学研究会 編

角川文庫

太陽のない街



昭和二十八年十一月三十日 初版発行
昭和四十三年三月十日 三十版発行
昭和四十五年二月二十日 改版三版発行

定価は、帯・カバー
に明記してあります

著作者 徳永直
とくながすなお

発行者 角川源義

印刷者 中内あき子
東京都豊島区高田一ノ十二

東京都千代田区富士見二ノ十三 株式 角川書店
〒一〇二 振東京一九五二〇八 会社
電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

中光印刷・多摩文庫

太 陽 の な い 街

徳 永 直



目次

太陽のない街

五

注 釈

二七

解 説

徳永直一人と作品

佐藤 静夫

二六〇

主要参考文献

二六九

年 譜

二七二

街

1 ビラ

電車が停^とまった。自動車が停^とまった。——自転車も、トラックも、サイドカーも、まっしぐらに飛んできては、次から次へと繋^{つな}がって停^とまった。

——どうした？

——何だ、何が起こったんだ？

密集した人々の、しごく単純な顔と顔を、黄色っぽい十月の太陽が、ひどい砂ぼこりの中から、粗^{あら}っぽくつまみだしていた。

人波は、水溜りのお玉じやくしの群れのように、後から後から押してきては揺れうごいた。

——御通過だ——摂^{せつ}政^{しやう}宮^{のみや}殿下^{けい}の高師行啓^{かうしぎやうけい}だ！

最前列のささやきは、一瞬の間に、後方へ拡がっていった。自動車は爆音をとめ、人は帽子を脱^とった。

十五分あまりが経^たったとき、最前列にいたものは金ピカの警部と、堵^と列^{れつ}した警官の挙手^{きよしゆ}の間を五台の自動車が、フィルム影のように音もなく走り去るのを見た。漆黒^{しつこく}の幌^{ほろ}に菊花の紋が一つ

輝いてほこりっぽい光線の中に、キラリと群集の眼を射た。しかし、後方のものには警官の帽子が見えただけであった。

遮断線しゃだんせんが解かれた。

人波が、堰せきを弾はじいて、流れだした。そのとき、

——痛えッ、コン畜生ッ、気をつけろッ！

流れにもまれていたモジリを着た男が、飛び上がるように叫んだ。黄色いレインコートを着た男が突然彼の胸にぶつかったからである。

——何しやがるんできい。——同じようにぶつつかられた二、三人が一度に叫んだ。モジリは、屈強な腕をのばして、この乱暴な洋服男のレインコートの端をつかんだ。

——そいつを捕つかまえろ！

しかし、レインコートは、つかまれながら、群集の肩越しに右腕をつきだして、そう叫んだ。

——そいつを捕まえろ！ 彼は叫びながら群集の中を泳いで、前のほうにつき進もうとした。

その瞬間——ヒラヒラと、三尺あまりの高さに、サッと舞いあがった、まっ白な紙片が、ひらひらと頭の上に落ちてくるのを群集は見た。

——そいつだ！ その絆纏はんてんを捕まえろ！！

刑事らしい男はまた叫んだ。足を踏まれたモジリは、びっくりして手を離れた。が今度は眼の前にとび出してきた制服巡査が、したたか彼を蹴け飛ばした。彼は気がついたようにどなった。

——泥棒どろぼうだッ！

人波はめちやくちやに混乱した。倒れた自転車の上に、のめったトンビが折り重なった。

——スリだ！

——そうじゃねえ、社会主義者だ！

制服や、私服が、群集を突き飛ばしながら、犯人を押さえようと跳び廻った。が、どこにもぐったのか肝腎の絆纏姿はもういなかった。

——ビラをあげたかね、さっきあいつが撒いていった……。

レインコートは、息を切らしながら、制服に聞いた。

——見えませんが……

——そんなことはない、ばかな——

彼は不興げに首をふって、うしろをむこうとした。

——アッ、それだ!!

突っ転がされた老婆が、地べたに落ちていた紙片で、泥になった前褌を拭こうとしているのであった。

これじゃないか？ これだ！

キョトンとした老婆の周囲に、群集が寄ってきた。私服は、ビラを老婆の手からふんだくった。

親愛なる小石川区民諸君!!
並に東京市民諸君にうったう!!

吾々大同印刷会社従業員三千、家族一万五千人の争議団は、横暴なる大資本家大川社長かんさくの奸策かんさくによって、鑄造課ちゆうぞうか三十八名の馘首かくしゅを名とし、吾々の組合出版労働を根本より打ち碎き一万五千の糊口こうを飢餓きがに陥れんとする悪辣あくらつなる魔手に対抗して、すでに五十余日を闘ってきた。吾々の所屬する全日本労働組合評議会および全国の労働者団体より熱誠なる支持応援を得て、飽くなき大資本閥大川と闘い、全日本無産階級の最前線における吾々の牙城がじょうを一步も退かしめざるべく、必勝を期しているものである。

親愛なる小石川区民諸君!!
並に東京市民諸君!!

諸君は、賢明なる諸君はかならずや吾々争議団の正義に味方されるものと信ずる。個人の利得によつて、一万五千の糊口きゆうちを窮地に陥れ、ひいて小石川区内、白山御殿はくさんごてん、久堅ひさ、戸崎とさきの各町の商人諸君をまで困乏に追いこみ、あらゆる悲惨事を生ぜしめても恬てんとして省みざる彼大川の貪慾どんよくを憎悪排撃されるものと信ずる。

吾々は正義の名においてうったうたう。
諸君の支持応援と、また諸君の輿論よろんにおいて、この不徳漢を葬ほうむり、吾々争議団の勝利に尽力せられんことを。

一九二六年十月十日

大同印刷争議団
小石川区民有志

私服の眼は、梢上しょうじょうの小鳥のように、活字と活字の間を飛んだ。

——これだッ！

制服に、何かささやくと、彼はすぐ、左側の商店へはいつていつて、自転車を引ッ張りだすところかへ消えた。

自動車がラッパを鳴らした。電車が動きだした。しかし、群集は、小学生が使ったケソムの痕あとのように、まだ小汚こぎたなく、十字路のあちこちに落ち散っていた。そして不安そうにささやきあった。

——きつと、何かあったんだぜ。

ビラ一枚に、あんな騒ぎは不当であった。群集は、交通整理や、制服に追い散らされながら、それでも、商店の軒下、ポストの蔭などに、好奇的にへばりついた。

——来た、来た！

急短な爆音を立てて、サイドカーが疾走はしってきた。サーベルを杖つえにした署長がのっていた。

サイドカーは、緩いゆるカーヴを描きながら、現場を一周した。やがて一人の制服が、署長の面前に挙手の礼をした。署長は、口早に何か命じた。サイドカーは、そのまま電車通りから約一丁、正門まで砂利を敷き詰めた、東京高師*の、構内へ消えていった。

十分も経たないうちに、二十名あまりの制服が、駈足かけあしでやってきた。そして現場から高師正門までまるで写真のような無表情さと正確さで、ズツと立ち並んだ。

2 上と下

摂政宮殿下は、御機嫌であつた。

満庭の生徒一同へ、しつらえの御座所より、御挨拶あそばされたとき、謹厳きんげんな老校長は、あぶなく涙がこぼれそうであつた。

秋の陽ひは晴れていた。殿下は御先導申しあぐる老校長の後から、記念の御手植えあそばさるべく、校内の前庭へ歩を運ばれた。

自然の丘陵きゅうりやうをならし、ひろい大池を中心にした前庭は、鬱蒼うつそうとして樹木に囲まれていた。檜ひのき、柏かしわ、松、杉等の大木が、昔のままの山の名残を見せて、枝を交えている。

——迎賓橋けいひんきやうは水のない溪谷けいこくに架かけられたものであつた。

随伴ずいはんのシルクハットや、長剣を佩おびた武官やが、瀟洒しょうしやなモーニング姿の殿下の後に随したがつて迎賓橋の半ばまで、歩いてきた。

殿下は足を停とめさせられた。老校長は、びっくりとして殿下を仰いだ。後にいた事務官が、心得顔に校長にいった。

——いい景色です。……東京市内に、こんな絶景があろうとはまったく意外です。

まったく！ 迎賓橋上から、東南を眺めた景色は、たしかに殿下の御足を停めさせまつるものがあつた。足下から、駆けおりた森林は、ただ一色の枝葉を差し違えたまま、また向こうの山まで一息に駆け上っている。紺紫のつばさに銀白の腹部を、チラとのぞかせた巨大なつばくらが一

翔りにすくったように。

——向こうは、昔、幕府時代には、白山御殿といひまして、徳川公の御殿跡であります。もつとも、別荘といったものでありましょう。それから右へ、細川公の下屋敷、阿部侯の上屋敷などがあったところと、承知しております。

随伴の人々は、動いてゆく老校長の指の方向を、あっけにとられて見とれた。

——それから少し下って、山腹ともいふべきあの森林が、植物園でありまして、昔は徳川公の薬草園、真向かいになる、こちらの山は、本校構内に連なつて右へ、松平公一門の上屋敷跡で、現在でも通称、清水谷と申しております。

殿下は、興味深そうに聴いていられたが、フト校長へ言葉をかけられた。

——向こうの山と、こちらの山との間に、谷があるわけだが……見たいものじゃ。

——ハッ。

と言つたが、老校長は恐縮してしまった。白髪の、顚頂部まではげ上がった額へ、そつと手を当ててから、思いきつたように、申しあげた。

——え、以前は千川上水と申しまして、立派な溪谷の形態を保ち川も綺麗でありましたが、現在には田圃や、河ふちを埋めたてまして、工場もでき、町も四つほどできまして、三、四万の町民が生活いたしております。

シルクハットが駭いた。

——ホウ？ あゝの森の間にですが、ホウ？

軍服たちも、ビックリした。職業柄、望遠鏡でもあったら、その森の間に、それほどの空間があるかどうかを見たであろうが……肉眼では、とても、想像すら不可能だった。

しかし幸いに、殿下は、それだけの御下問で、足を移させられた。老校長はホッとした。

そうした世事には、比較的うとい勅任官従四位の老校長といえども、あのやっと一平方マイルにも足りない谷底に、東京随一の貧民窟トンネル長屋があり、十数年前の千川上水が、現在では、あらゆる汚物を呑んで、梅雨期と秋の霖雨には、きまって氾濫しては、四万の町民を天井へ吊し寝床を造らせている。千川改修問題が、市会議員や区会議員の立候補の演説材料にはなっても、市会の議題には上らないで、今春も町内の娘子軍が、市庁へ押し寄せて示威運動をやったことも知っていた。まして、四か町の労働者、小商人の生死の浮沈となっている、目下の大同印刷争議が、日々に悪化し、予期しえざる危険が、今夜にも勃発しないとも限らない現状を、かの老校長といえども知らざるを得なかったからだ。

太陽は、山から山へかくれんぼした。

「谷底の街」は事実「太陽のない街」であった。

千川どぶは、すっかり旧態を失って、無数の地べたにへばりついたようなトンネル長屋の突出に押しゆがめられて、台所の下を潜り、便所をめぐり、塵埃と、コークスのカラと、空瓶や、襪や、紙屑で川幅を失い、洪水によって、やっとその存在を示しているにすぎなかった。

その千川どぶが、この「谷底の街」の中心であるように、それから隔たり、丘陵に沿うて上るほど二階建もあり、やや裕福な町民が住んでいた。それは、洪水を避け、太陽に近づくことであ

り、生活の高級さを示すバロメーターのようなものであった。役付き職工、事務員らは松平という華族と門を並べている大川社長の邸宅が、山の頂辺にあることなどからおしても、ごく自然なことと考えていた。

大同印刷会社は、街の中心にあった。そしてその裏門から通ずる三間幅の道路は、丘陵の傾斜面とトンネル長屋との間を縦断して、唯一の表通りとなっていた。

小商人たちは、その表通りへ並んでいた。一膳めしや、酒場、魚屋、呉服屋、雑貨店、薬屋、酒屋、等等等……

魚屋も、八百屋も、市場への買出しには朝早くは出かけなかった。午前中の魚河岸^{うおがし}で、青物市場でこのトンネル長屋に向く、魚や野菜はなかったからだ。彼ら小商人たちは、需要者のコツと、懐中^{ふところ}かげんをよく知っていた。

職工たちは、昼間と夜間の半分を、工場の板の間で過ごし、夜のホンの一時間ばかりのうちに、一日の享樂をむさぼらなければならなかった。飯を食い、酒場でアクどい酒をあおりつけ、銭湯の中で酔いを醗酵^{はっこう}さすことが、最も順調な一日であった。

太陽の目の通らない六畳一間に、五人も六人も家族が寝起きした。妹が嫁にゆき、弟がかたづかしなければ、兄は三十になっても嫁をもらえなかった。

——だって、お前、いちいち夜半に眼を覚まさせるのは罪だからな——。

しかし、笑ってできる話ではなかった。彼ら男女は、ほとんど工場で知りあい、彼らの多くは「工場の恋」であった。だが、争議が始まってから以来、彼らは、お互いがひどく変わった自分

たちを発見した。顔色が青ざめて、しなびていた。工場でのお互いは元気があり綺麗に見えた。作業服の上っ張りに、白い前だれを当てた様子も、労働服の上着を脱いでシャツ一枚の姿も、ひどく頼もしく思えたのだった。

しかし、そのそぐわない、疲れたような、すぐどなりだしそうな顔色は、彼ら若い男女ばかりではなかった。気むずかしく傲然と、がらんどうのくせに威張ったような工場の煉瓦の建物を取り巻く、この「太陽のない街」全体がそうだった。

表通りの小商人たちも、長屋の嬖たちも、子供の小遣で食っているし、こ細工やも、飴売りの婆さんも……すべてがそうだった。

彼らは咽喉仏のところで、何か、からまりついていて、ひどく性急になっていた。彼らは咽喉仏のところは何がからんでいるかは判らないが。

——糞ッ、やっちまえッ！

と、どなりだしたい憤りが、すぐ顔に出た。

3 住民

——だからね、お爺さん、姉さんが帰ってきてから、相談なさいよ。妾には、とてもそんなこと……

お加代は受け太刀になっている。それで姉の高枝が帰ってきたら……というのだ。お加代は内気なだけに、姉ほどに病父を言い負かすことはできないものの、この争議を裏切るなんてことは